

ライティングセンターの「あるべき姿」とは

——第21回FDフォーラムに参加して——

外山 敦子
TOYAMA Atsuko

1. はじめに

学生の「書く力」を育成するため、各大学で様々な取り組みが行われている。なかでも近年注目を集めているのが、学生の文章作成を正課外で個別に支援する施設、すなわち「ライティングセンター」である¹⁾。

2016年3月5日(土)・6日(日)、「第21回FDフォーラム(公益財団法人大学コンソーシアム京都主催)」²⁾が2日間の日程で開催された。このうち第2日目の分科会のひとつとして「大学におけるライティングセンターの役割(コーディネーター:長谷川岳史氏(龍谷大学))」というテーマが設けられた。報告は、佐渡島紗織氏(早稲田大学)と小林至道氏(関西大学)、そして稿者の3名が務め、ライティングセンター設置までのプロセスや、設置後の状況、支援内容などの取り組みの概要をそれぞれ報告し、ライティングセンターが大学教育で果たすべき役割や、「書く力」を育成する支援が大学教育に及ぼす影響について議論した。

本稿では、学生の「書く力」を育成するためにライティングセンターができることとは何か、そのためにどのようなシステムや組織を構築すべきかという観点から、本分科会における議論を報告する。

2. 各大学の取り組み

2.1 早稲田大学「ライティング・センター」の取り組み

早稲田大学「ライティング・センター」は、2004年の発足後今日に至るまで、日本の大学における初例としてこれまで多くの大学に多大な示唆を与えてきた。「自立した書き手を育成する」というセンターの理念や、「紙を直す(添削する)のではなく支援者との対話によって書き手の成長を促す」という指導方針は、後続の大学がこれに倣ったことで、いまやライティングセンターの基本姿勢として定着しつつある。さらに、これまでの10年以上にわたる豊富な実践と運営のノウハウは、佐渡島・太田(2013)³⁾に集約されている。

佐渡島氏は、日本の初等・中等教育における文章作成指導の特徴として、作成途中で他人に文章を見せて修正するという指導があまりなされておらず、そうした学生が自主的にライティングセンターを訪れるのは、実は勇

気があることであると指摘する。学生は、センターを利用するために締切よりも早く文章を作成しなければならない。また自分自身で問題点も整理しなければならない。ライティングセンターとは、学生にとって高校にはない学びの形態であり、利用すること自体が「学習」というわけだ。

早稲田大学では、チューター(大学院生)が学生を直接指導し、教員はそのチューターを育成するという二重の教育体制をとっている。これによって、全学生53,000人へのライティング支援が可能になっている。また、それゆえにチューターの育成が「質保証」の重要な鍵を握ること、そして育ったチューターがセンターの発展に大きく貢献していることも、氏が強調されたことの1つであった。

2.2 本学「ライティングサポートデスク」の取り組み

本学「ライティングサポートデスク」は、学内の研究助成費⁴⁾を得て2014年に開室し、2年が経過したところである。

本報告では、スタッフ数や予算、組織の枠組みなど様々な事情や制約があるなかで、いかにして学修支援の継続と充実を図るかという観点から、本学における実践を紹介した⁵⁾。

その実践の特徴は、基本的な運営の枠組みを先行する他大学(早稲田方式)に学びながらも、本学で実現困難な部分は大幅な改良や変更を加えている点である。そのうちの1つが、学部生スタッフの採用である。本学では大学院生スタッフの不足を補うため、複数の学部生が受付業務等を担っているが、この学部生の存在がデスクの親しみやすさにつながり、利用者増に大きく貢献した。現時点のメインユーザーが初年次生(利用者全体の約9割)であることをふまえ、今後は学部上級生をピアチューターとして育成することも検討している。

ライティングセンターの運営には、大学の規模や諸条件・制約によってフレキシブルな対応が求められる。悪条件を「強み」に変える柔軟な発想の転換によって、大学独自の持続可能なシステムが構築できると考えている。

2.3 関西大学「ライティングラボ」の取り組み

関西大学「ライティングラボ」は、前身である文学部「卒論ラボ」から発展し今年で設立5年目になる。現在、津田塾大学と文部科学省大学間連携共同教育推進事業「(考え、表現し、発信する力)を培うライティング/キャリア支援」(2012年～2017年予定)を推進中で、複数キャンパスへの展開や取り組みの多様化に伴い、ラボの利用者数も大きく増加している。

ラボにおける取り組みは、①学内認知度および利用件数増加に関わるミッションと、②学修支援サービスの質保証に関わるミッションとに分かれるとされ、小林氏からはその変遷と拡充に関する詳細な報告があった。具体的には、ライティング支援イベントの企画、補助教材の作成、授業との連携、広報活動の充実、チューター研修プログラムの刷新、Webシステムの開発、ライティンググループの導入など、先進的かつ優れた取り組みの数々が紹介され、いずれも示唆に富むものであった。

3. ライティングセンター運営上の課題

ライティングセンターは、発足時のみならず、その後も運営上クリアすべき課題が多い。会場では多くの具体的な質問が挙がったが、それらを大別すると以下の3点になる。

第1に、ライティングセンターで直接学生を指導するのは、どの立場から(教員、大学院生、学部上級生)が最も望ましいのかという問題である。一般には大学院生チューターのイメージが強いが、院生が集まらない大学はどうするのか。院生の代わりに学部生を採用した場合、支援の質は担保できるのか。教員が直接指導すれば質保証は可能かもしれないが、学生にとって教員は「権威」であり、ピアの立場からの支援は望めないのでは、などの問題が挙がった。

第2に、特定の科目や他部署との連携をどこまで/どう図るかという問題である。例えば、正課科目とレポート評価基準を共有しているか、授業担当者からセンターを利用した学生の情報提供を求められた場合や、授業担当者が学生にライティングセンターの利用を禁じる場合など、個別の要求にどう対応しているかなどが話題に挙がった。

後者の問題で見逃せないのは、ライティングセンターの役割に対する学内の理解が必ずしも充分ではないことだ。センターを利用したとしても文章を修正するのはチューターではなく学生本人であり、学生の実力以上の文章が完成するわけではないが、一部ではそう捉えられていない向きもある。学内教職員へはあらゆる機会を通じてセンターの役割を丁寧に説明しなければならず、運営主体としてその責任を改めて認識するに至った。

第3に、ライティングセンターの「成果」とは何か、そ

れをどう測定するかという問題である。これについては佐渡島氏から、①大学の研究力向上への貢献度、②チューターの指導力、③学生の学びの姿勢の変化、④学生のライティング力そのものの4つの観点から「成果」を提示できるという補足説明があった。ただし、特に④に関しては、ライティングセンターが正課科目とは異なり学生の完成稿を入手できる立場になく、センター利用前と利用後との比較、利用者と非利用者との比較が難しいという宿命的な問題を抱えていることも、同時に指摘されている。

4. ライティングセンターの「あるべき姿」とは

分科会の終盤、会場から「そもそもライティングセンターがなければ学生の文章力は向上しないのか」という根本的な問いが挙がった。この10年で、ライティングセンターへの関心は高まっており、先行する他大学に追随する動きも見られる。実践報告や成果報告も近年多く公表されるようになった。だが、学生の文章力向上プログラムは、個別指導以外にも当然ありうる。学内でいつの間にか「センター設置ありき」の議論になっていないか、いま一度問い直す必要があるだろう。

自明のことだが、どのような学生を育成したいかによって、目指すべきライティング支援のありようは異なる。支援者を誰にするか、正課科目とどこまで/どのような連携を図るのかなども、これと切り離して考えることはできないし、大学によって望ましい答えは異なるはずだ。他大学の成功例が自校にとってもそうであるとは限らない。学内でコンセプトを共有しつつ、各大学における創意工夫が今後一層求められることになるだろう。

注

- 1 個別的ライティング支援施設の名称は大学によって様々である(本学では、「ライティングサポートデスク」という名称を用いている)が、本稿では便宜上最も一般的な名称である「ライティングセンター」を用いることとする。
- 2 本フォーラムは、「大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～」を統一テーマに、1日目はシンポジウムが、2日目は13の分科会とポスターセッションがそれぞれ行われた(会場：京都外国語大学)。
- 3 佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み—』ひつじ書房、2013年。
- 4 本研究の成果は、永井聖剛ほか「「対話」を重視する「全学的ライティング支援」の実践的研究」成果報告(『愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇』第6号、2016年3月)にて公表。
- 5 具体的な実践は、本誌「平成27年度ライティングサポートデスク活動報告」を参照されたい。